

令和7年度 第77回 卒業式 式辞

本日ここに、PTA、同窓会そして、富澤学園関係の皆様を来賓にお迎えし、保護者の方々ご列席のもと、第77回東北文教大学山形城北高等学校卒業証書授与式をこのように盛大に挙げていきますこと、この上もない喜びであり、卒業生とともに厚く御礼申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与しました357名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

3年前の入学式で、私は「苺狩りで食べる苺はどうして美味しいのか」という話をしました。人から与えられたものではなく、自分が選択にかかわったという行為には、主体性という重要な要素が含まれ、それが喜びにつながる——そうした話でした。城北で味わった三年間は、いかがだったでしょうか。甘い苺もあれば、酸っぱい苺もあった。そんな思いを抱いている人が多いのかもしれない。

それでも今ここに、皆さんが卒業を迎えることができたのは、喜びも苦しみも分かち合った友人、失敗を恐れず挑戦することの大切さを教えてくれた先生方、そして苦しみの中には必ず光があると励まし続けてくれたご家族——多くの支えがあったからにはほかなりません。

そして、保護者の皆様、本日はお子様の立派に成長された晴れ姿に、感慨ひとしおのことと拝察いたします。十八年と少し前、産科の診察室でモニターに映る小さな命が、力いっぱい鼓動を打つのを見つめながら、大きな喜びとともに重い責任も感じられた日があったことでしょう。

熱が下がらず診療所へ駆け込んだ夜、登校を渋った朝、友達と喧嘩をして泣いて帰ってきた夕——挙げればきりが無いほど、心配の連続だったに違いありません。けれどそのたびに、眠る横顔にほっとしながら、明日を信じて愛情を注いでこられました。

高校生になってからは、無口になったかと思えば強い口調で言い返してきたりして、距離の取り方に戸惑われたこともあったでしょう。しかし、それはまさに自我の目覚めです。思春期は子どもにとって、自分自身になっていくための大切な時期であり、親離れ・子離れの最終局面でもあったのです。

そうした日々であっても、変わらぬ優しい眼差しでお子様の喜びや悩みに寄り添い、また本校教育に対しましても、温かいご支援とご協力を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。手を引いて歩いた日々は、いつしか肩を並べて歩く日々となり、そして今、背中を見送る日を迎えました。これまでの長い歳月に渡る歩みに、深い敬意とねぎらいを表します。

さて本日は、卒業生の皆さんに一つの物語を贈ります。

その少年は、幼いころに交通事故で父を亡くしました。しかも、事業を営んでいた父には二千万円もの借金が残っていました。母は不平不満を口にせず、昼も夜も働き詰めで借金を返しながら、女手一つで子どもたちを育て上げました。母の口癖は、「貧しくても、義理と人情だけは欠いてはいけない」だったそうです。

ある日、母は知人の法要に出席し、折詰の中にあつた二切れのマグロを口にせず、大事に持ち帰ることにしました。そして、こう言ったそうです。「半分に切って分ければ、家族みんなで食べられる。その方がおいしい。」

二切れのマグロは、豪華なごちそうではありませんが、一家にとっては、“希望の味”だったのだと思います。少年はそのとき、胸の奥で誓います。「いつか、母に腹いっぱいマグロを食べさせてあげたい」と。

やがて中学卒業の日が近づきます。成績はたいへん優秀でしたが、経済的に高校へ通わせる余裕はありません。行きたいのに、行けない。——努力だけでは越えられない現実が、そこにありました。そこで少年が選んだのは、給料をもらいながら学べる道でした。十五歳で、航空自衛隊の生徒隊に入隊するのです。父の葬儀の日、空を戦闘機が飛んでいくのを見たその瞬間から、パイロットになることを夢見るようになっていたのです。

しかし、現実には甘くありませんでした。パイロットになるには、高校を卒業し、自衛隊の操縦学生になる必要があったのです。そのことを知らないまま、彼は「体力さえつければ夢に近づける」と信じ、朝晩欠かさず十キロのランニングをして、必死に訓練を重ねていました。

パイロットになれないことを知った彼ですが、人生を投げることはしませんでした。自衛隊を退職したのち、中央大学法学部の通信教育課程で学び、司法試験を目指したのです。ところが、再び壁が立ちました。授業料は退職金で工面できたものの、法律の勉強には専門書が必要で、その

本を買うお金はありません。彼は、図書館で借りた本で勉強するしかありませんでした。

一方で、生活のためには働かなければならず、さまざまな仕事をしました。中でも彼が印象深く語るのは、百科事典の訪問販売です。売れなければ収入はありません。一日に六百軒を回り、三日で靴底に穴が開くほど歩いたのに、一冊も売れなかったといいます。心が折れかけ、公園で百科事典を開いて眺めていたとき、遊んでいた子どもたちが集まってきました。

彼は売る気も忘れて、ただ事典を読み聞かせました。すると子どもたちは次々に質問をする。その光景を見ていた一人のお母さんが「これは、ためになる」と言って一セット買ってくれました。そこから噂が広がり、注文が入るようになったそうです。

ここに、人生の大事なヒントがあります。うまくいかないとき、私たちは誰かのせいにしがちです。けれど、彼は違いました。人の役に立とうとした瞬間、扉が開いたのです。

そしてこの頃、職業安定所の紹介で、水産会社に入ります。幼い日に分け合った二切れのマグロの思い出がよみがえり、「ここだ」と感じたといいます。捨てられるはずの小さな切り身を弁当のおかずになるように加工して売る。不要とされるイカの耳を練り物にして売る。工夫を重ねるたびに売り上げが伸び、仕事はしだいに面白くなっていきました。

しかし、仕事にのめり込むほど、司法試験の勉強時間は削られていきました。進路に悩み、大学の教授に相談した末、司法試験を諦め、水産の仕事に専念する決断をします。それでも大学の学びは続け、七年かけて卒業します。

——この少年こそが、のちに築地で寿司店を開き、多くの人を知る店へと育て上げた人物。「すしざんまい」を展開する木村社長です。

木村社長は言います。パイロットの夢も、司法試験合格の夢も実現しなかった。けれど、無駄なことは一つもなかった。自衛隊の三交代制の経験は、二十四時間営業の店のシフトづくりに生きた。司法試験の勉強で鍛えた記憶力は、お客様の顔や連絡先を覚える力になった。決して遠回りではなく、積み重ねだったというのです。

そして、母は亡くなる少し前、病院へマグロを持って行ったときも、同じ部屋の患者さんや看護師さんにお裾分けしていたといいます。「みんなで分け合って食べればおいしい」——その母の言葉は、今年の初競りで大間のマグロを五億円あまりで落札し、それを特別な人だけのものにせず、多くの人にいつもの価格で味わってもらいたいという木村社長の振る舞いに、いまでも静かに息づいているように思うのです。

木村社長の人生で胸を打つのは、数々の挫折の日々を、恨みではなく、新しい志へと変えていったところでしょう。今が逆境にあっても、閉じた扉の前で諦めてはいけません。いつか自分の力を「誰かのため」に使うとき、きっと人生の扉は静かに、やがて確かに開いていきます。

そして、木村社長の座右の銘は「誠実」だといいます。誠実とは、約束を守ること、言い訳をせずに自分と向き合うこと、そして、つまずいたときにもう一度立ち上がることです。今日皆さんが手にする卒業証書は、いつでも再出発できることを示す証明書でもあります。

結びになりますが、卒業生の皆さん、毎日のお弁当や雨の日の送迎など、皆さんのあらゆる日常に家族の愛情が込められていたことを忘れないでください。校則を破って厳しく叱られたことや、交友関係の悩みに親身になって話を聞いてくれたことなど、先生方の誠意も決して忘れないでください。そして、これからは新しい出会いの中で、誰かを愛したり、手を差し伸べたりしながら、《敬愛信》の精神を忘れず真っすぐに生きてください。生きるということは、ただそれだけで価値があるということも、生涯忘れずにいてください。

最後に、皆さんの今日という日を、天国から静かに見守っている人もいるでしょう。直接「おめでとう」「ありがとう」と言葉を交わせなくても、これまで無言で背中を押し続けてくれたその人へ、心の中でそっと感謝を届けてください。

皆さん一人ひとりの歩みが、やがて誰かを支える力となることを願い、式辞といたします。

令和8年3月1日

東北文教大学山形城北高等学校 校長 大沼 敏美